学際研究の課題とその展望

Issues and Future Perspectives of Interdisciplinary Study

久米崇[1]

Kume Takashi

1．はじめに

総合地球環境学研究所（以下，地球研）は，その理念の一つに世界でも希有な文理融合を掲げる研究所であり，在籍する研究者は生態学，気象学，情報工学，哲学，考古学，文化人類学など多岐に亘る．農業土木分野の出身者は 100 名を超える研究スタッフの内のごく数名にすぎない．研究者は研究プロジェクトに属し，当初計画に揚げた目的を５年間で達成させるべく研究を実施する．ここでは，異分野の専門用語が飛び交い，未知の学問分野と自分の専門分野の接点を探しつつ議論を深めていく作業が行われている．しかし，この作業は見かけほど単純ではなく，地球研の多くの研究者は個人レベル，プロジェクトレベルのそれぞれにおいて課題を抱えているように私には見える．ここでは，学際研究を異分野の研究者が集まり実施する研究と定義し，等身大の自分を描写することにより，その課題とその展望を考えてみたい．

２．地球研の中の自分

私が地球研に赴任したのは，2004 年 4 月である．所属するプロジェクトの残り期間は３年，すなわちプロジェクト付研究員の私の任期も３年という事である．私が所属するプロジェクトは，トルコ共和国やイスラエルの大学・機関を主なカウンターパートとする国際プロジェクトである．赴任してまず実施した事は，研究計画を立てることと現地とのやりとりの事務仕事を覚えることであった．赴任した１年目の現地滞在期間は約１か月程度．当初立てた研究計画のほとんどは未完のままであった．しかし，事務仕事の処理と英語のメイルを書くスピードは格段に速くなった．この点は大きな収穫であった．

２年目は周囲のサポートを受け，現地観測態勢を整えることができ，少しずつ現地のことも理解出来るようになった．事務仕事の効率も上がり，研究に充てる時間を少しずつ増やす事が出来るようになった．自分の研究が進み足下が固まってくると，自然と他者の研究にも興味がわき，より深い理解ができるようになった感じがした．これと同時に，地球研では自分が何の専門家であるかを宣言し，自分がどの立場から議論をしているのかを明確にすることが，異分野の研究者と学際研究を進める上で重要なのだと認識するようになった．

３．哲学家との交流

ところで，サミュエル・ベケットの「ゴトーを待ちながら」をご存じの方はどのぐらいいるだろうか．1969 年にノーベル文学賞を取った戯曲である．いつまで経っても現れないゴトーを皆で待ちながら展開する戯曲である．地球研にもこのゴトーのような哲学家がいる．この哲学家をここでは後藤さんと呼ぼう．後藤さんは同室の中ではもっとも共有した時間が短い．なぜなら，ほとんど研究所に来ないか，来てもすぐに帰るからである．しかも，この４月（2006 年）からは某大学への転勤が決まっており，今後彼が地球研に出勤す

---

[1] 総合地球環境学研究所（Research Institute for Humanity and Nature, JAPAN）

ることはない．

ここで，下記に述べる後藤さんとの（？）交流を読んで頂くことで地球研の学際的（？）な雰囲気を味わって頂きたい．後藤さんはいつ地球研に来るかわからない，よって，彼に用事のある人はゴトーを待ちながら状態になる．かくゆう私も「待ちながら」考古学者や生物学者と雑談し，かれらの研究内容や物の考え方を聞くことが出来た．雑談の中のおもしろかった話は，講演会当日まで内緒だが，大体後藤さんを訪ねる人は彼の周囲に座す人と次のような会話をする．

「後藤さん来ていませんか？」と訪問者,「今日はまだ来ていませんねぇ」と同室の人．

「いつ来るか聞いていませんか？」,「いや，聞いていません．私ももう一週間も会ってないのですよ．あはは」.「困りましたねぇ．あはははは（共に)」.

といった感じである．少々大げさであることは認めるが，大方こんな感じである．重要なのは，このあと「そういえばこの前・・・」といった感じで後藤さんを待ちながら，異分野の人との異種格闘技戦が始まる点である．作業をしている人も手を止め，わらわらと雑談に加わることも少なくない．誤解のないように申し上げておくと，戯曲と違い後藤さんは必ずいつかは現れる．つまり，地球研という所では，ふとしたきっかけで異分野の研究者と自由な雰囲気で議論を開始できるのである．補足であるが，後藤さんは論理的に議論を展開し，的確かつ適切なスルドイ考察をする極めて優秀な哲学家である．

４．自分の中の地球研

赴任当初は地球研の中に自分を置きひたすら仕事をするだけであった．しかし，ほぼ２年勤務して自分の中に地球研というものが少しずつ形作られてきた．参加するプロジェクト，トルコや海外の共同研究者，異分野の研究者などからそれは構成されている．地球研および学際研究に存在する課題とは，とりもなおさず地球研を構成する一人一人の中にこそあるのだと思われる．つまり，自分の研究を他者にいかに理解してもらい，また他者の研究を理解するのかという異文化交流．また，実務的な点，例えば異分野の研究者のアウトプットをいかにして自分の研究で利用するかということ．さらには，時間の流れがゆっくりの方々といかに議論を忍耐強くするかといった精神的な問題などである．まれに個々の能力は素晴らしいにも関わらず，プロジェクトの中でその能力を発揮しきれていないケースが比較的年配の方に見られる気がする．これは若い頃に異分野交流をしていないことが原因ではないかと愚慮される．自分はさておき，優秀な研究者が集う地球研において学際研究を実施する際の課題は，個々の研究よりもむしろ，研究者が一つのプロジェクトの目的を良く理解し，良くお互いの研究を理解すること，またそうすることの出来る仕組みを作ることであると思われる．

５．まとめ

地球研の雰囲気や，学際研究の課題について簡単に述べさせていただいた．地球研における学際研究の展望は，先に述べた課題を乗り越えることにより拓け，その先には人と人および人と地球がよりよく付き合っていける英知があると筆者は考えている．以上を踏まえ，学際研究を志す学生諸君に，私が助言できることがあるとすれば次の３点となる． 1) 自分の専門分野をしっかりと持つこと, 2) プロジェクトの趣旨をよく理解すること, 3) 異分野の研究者と大いに交流し議論をすることである．とりわけ 1) を確立することをまずはお勧めしたい．